

特集 歴史の舞台を行く 下総小江戸の佐原地域

地球一周分を歩いた測量家・伊能忠敬の熱情



忠敬肖像画

大事業に挑んだ生涯現役

伊

能忠敬は日本初の実測による日本地図を作成したことで知られていますが、それを五十歳過ぎてから成し遂げたということに驚かされます。

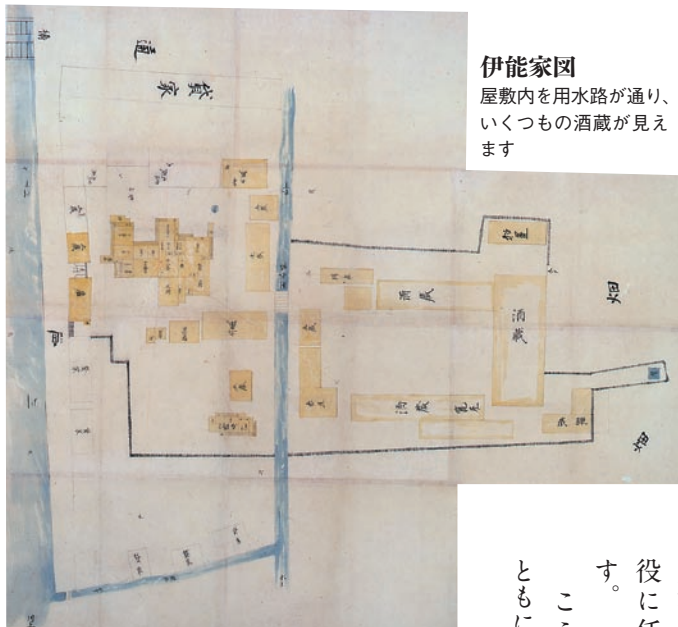
家業や公務の第一線から退いた後に、大事業に挑んだ忠敬の生き方は、生涯現役そのものであり、現代の我々に勇気を与えてくれます。生涯学習の手本として、また地球一周分の3万5千kmを歩いたウォーキングの達人として近年改めて注目されています。

こうした伊能忠敬を生んだ佐原の町と彼の生涯を振り返ってみましょう。

伊能三郎右衛門家 十代当主忠敬

測量作業も大詰めを迎えた1813（文化10）年、九州から娘の妙薫（みょうくん）へ宛てた手紙に68歳の人生を振り返った一文があります。

自分は幼年の頃より名を挙げようと努力したが、親の命で佐原へ養子にゆ



伊能家図

屋敷内を用水路が通り、
いくつもの酒蔵が見え
ます

くことになった。そこでは好きな学問もやめて家業に精を出し、家訓を守って村民のための救済活動もしてきた。そうした結果名を高めることができた。隠居して江戸へ出たのも天の定めた運命だったのかもしれない。

大事業達成を前にした忠敬の、素直な心情が綴られています。

忠敬は1745（延享2）年、山辺郡小関村（山武郡九十九里町）の小関家に生まれます。6歳のときに母を亡くし10歳で武射郡小堤村（山武郡横芝光町）の父の実家神保家に入ります。そして1762（宝暦12）年17歳で佐原村の伊能三郎右衛門家へ婿入りしました。

その頃の佐原は中央を流れる小野川に大小の川船が行き交い、大店が軒を連ねる商業都市として賑わっていました。伊能家も酒造業を中心に農業や金融業、水運業などを営む総合商社として手広く商売を行なっていました。忠敬は事業をさらに発展させるとともに、飢饉の際には困窮人への施しを行い、その功により領主津田氏から苗字帯刀を許されています。また

39歳の時には佐原村の名主後見役に任命されます。

こうした公私ともに多忙のなか、

忠敬は暦学の勉強もして

いました。伊

能家には581

種類約2千冊を

超える書籍群がありました。そうした環境が彼の向学心を刺激したのでしょう。そして実年期を過ぎた1794（寛政6）年49歳で息子景敬に家督を譲り、本格的に暦学を学



測量日記

測量先で書いた日記を後で忠敬がまとめたもの。全28冊



東日本沿海図（文化元年、複製図）



あらいす 鹿絵図

伊能測量隊は測量と同時に、周辺の地形も俯瞰的に記録しています。伊能図に立体を与えています

ぶ決意をしたのです。

暦学から 全国測量へ

忠敬の頃の暦

は幕府天文方が作成していま

したが、民間の暦学者に誤りを指摘されるほど不備が多

いものでし

た。幕府は暦の権威を取り戻

すべく天文方として新たに採用し

たのが西洋暦学を修めていた高橋至時

で

した。1795（寛政

7）年に著名な学者が大阪

から江戸へ来たということは文人間のネットワークで、忠敬も当然知って

いたのでしょうか。そしてこの機を待っ

ていたかのように同年江戸へ出て入門します。

当時、暦学者の間では地球上の子午線（緯度）一度の正確な距離を調べる

ことが注目されていました。それには

南北方向の長距離を測ることに同時に、各地での天体観測が必要でした。しか

し諸大名の土地を勝手に測ることはできません。そこで天文方は蝦夷地の



半円方位盤 目標物の方位を測ります

地図を作るために東北地方の測量を願い出たのです。その結果、許可がおりて忠敬が測量することになったのですが、天文方の弟子とはいえ商家の隠居では問題だったのでしょう。その時の忠敬の肩書は「佐原村元百姓 浪人 伊能勘解由忠敬」忠敬は武士身分になったのです。

日本中の測量御用を命ぜられたが、それも各大名方のお世話により諸国を廻ることができた。こうしたことは誠にありがたいことであり、先祖のおかげ

でもあるが、私への天命だったのかも知れない。

九州からの手紙に忠敬は自身の後半生をこう記しています。

全国測量に56歳で出立

忠敬の測量は最初の蝦夷地測量から最後の江戸府内測量まで計10回行われました。東日本の測量は第4回までで終了し、1804（文化元）年にはその成果をまとめた地図を幕府へ提出しました。それは將軍家斉も上覧し、出



象限儀(小) 坂道の傾斜角を測ります



製図用具 右2本が鳥口、左2本は点線器



伊能家土蔵 佐原でも古い土蔵で忠敬が婿入りする前のもの



伊能家旧宅 店舗部分で奥に書院が続いています

来栄えが良かったのか、それ以降の西日本測量は幕府の直轄事業となったのです。

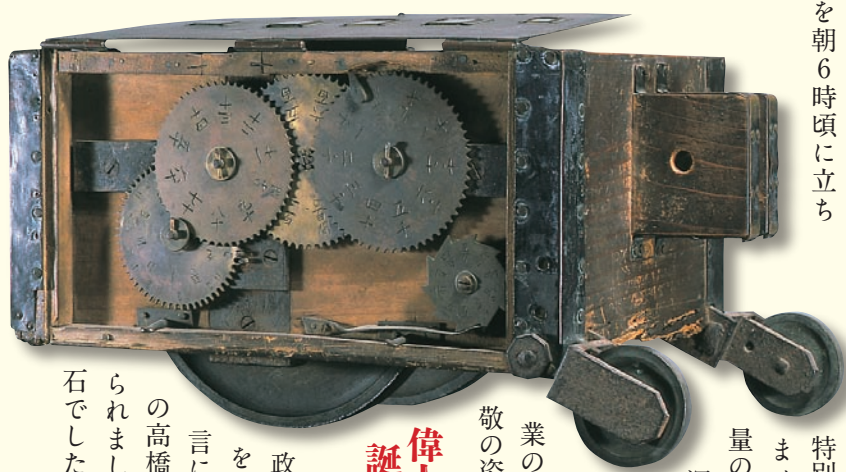
さて房総半島の測量は第二次測量にあたる1801（享和元）年の6月から7月にかけて行なわれました。その様子は「測量日記」にみえますが、そこには天候や測量した村の領主や村高等を記しているだけです。日記といっても業務日誌のような書き方になってるのは、後で幕府へ提出する可能性もあったので事務的な記録だけにしたのでしょう。

通常の測量は宿を朝6時頃に立ち午後3時頃に入ります。

明るいうちに切り上げるのは、その日の集計と天体観測の準備があるからで、そのため名主宅や本陣などの広い家を宿にしました。

7月18日には飯沼村（銚子市）に着きそこで

量程車 紐をつけて地面を引き、車輪の回転数が距離として窓から見えます。誤差が大きく余り実用的ではありませんでした。



忠敬は1818（文政元）年に73歳の生涯を終えました。墓は遺言により江戸浅草源空寺の高橋至時の墓の隣に立てられました。当初は小さな墓石でしたが1823（文政6

偉人伊能忠敬の誕生

特別なことは記されていません。また忠敬は測量の旅に出る際には必ず深川の富岡八幡宮を参拝しています。学問に対する科学的な精神とともに、事業の無事を神頼みする忠敬の姿も興味深いものです。

8泊しています。長期逗留していたのは銚子から富士山を観測するために天候待ちをしていたからです。伊能測量隊は富士山などの遠方の目標物を多方向から測ることで、誤差を減らしていたのです。



象限儀（中）



伊能忠敬記念館内



忠敬の墓（香取市牧野・観福寺）



忠敬出生の地（九十九里町小関）



象限儀 (佐原中央公民館裏)

年)には忠敬の業績が刻まれた立派な墓石が立てられました。その他に墓はもう2か所あります。一つは伊能家の菩提寺である香取市牧野の観福寺で、そこには髪の毛と爪が埋葬されています。もう一つは多古町南中の平山家墓地です。これは忠敬が一旦同家へ養子に入ってから伊能家へ婿入りしているもので、そこにも立てられたわけです。地図完成の前に忠敬は没してしまいましたが、作業は弟子たちが引継ぎ、三年後の1821(文政4)年に完成します。しかし、幕府へ上呈された伊能図は秘蔵され幕末まで活用されませんでした。その間、伊能図の写しを国外へ持ち出して処罰されたシーボルト事件があり、また明治以降も皇居の火災や関東大震災による焼失など、伊能図は

数奇な運命をたどります。それでも日本が近代化を進めるなかで、伊能図は唯一の正確な日本地図として活用されました。

こうして地図の正確さが認められていくのに伴い、製作者である伊能忠敬



御用旗 (複製)

の名声が高まっています。1883(明治16)年には正四位が贈られ、さらに修身の国定教科書に取り上げられると、その名は日本中に広まってきました。地元でも佐原公園に1919(大正8)年に銅像が建てられ、さらに旧宅が国指定史跡となり、伊能家に伝わった地図や測量の道具類などは1957(昭和32)年に重要文化財に指定されました。そして19

61(昭和36)年には旧伊能忠敬記念館が、1998(平成10)年には現在の伊能忠敬記念館が開館したのです。日本初の実測による日本地図の作成という忠敬の偉業は、佐原が持っていた社会・経済・文化的な環境によって基礎が築かれたものであり、佐原には偉人忠敬を育んだ歴史的な景観が今でも残されています。

米谷 博・文

千葉県立中央博物館学芸員
写真協力/伊能忠敬記念館

■伊能忠敬略年表

和暦	西暦	年齢	事 柄
延享2年	1745	0歳	現在の山武郡九十九里町関に生まれる
宝暦元年	1751	6歳	母が亡くなり、父貞恒は兄と姉を連れて実家に帰る
5年	1755	10歳	父のもと(神保家、現在の横芝光町小堤)に戻る
12年	1762	17歳	佐原伊能家の婿養子となりミチと結婚。名を忠敬とする
安永7年	1778	33歳	ミチと松島へ旅行に行き「奥州紀行」を記す
天明元年	1781	36歳	佐原村本宿組名主となる
寛政5年	1793	48歳	関西へ旅行し「旅行記」を記す
6年	1794	49歳	家督を長男に譲り、隠居して勘解由と名乗る
7年	1795	50歳	江戸深川黒江町に住み、高橋至時の弟子となる
12年	1800	55歳	第1次測量(東北・北海道南部)
享和元年	1801	56歳	第2次測量(関東・東北東部)
2年	1802	57歳	第3次測量(東北西部)
3年	1803	58歳	第4次測量(東海・北陸)
文化元年	1804	59歳	日本東半部沿海地図を幕府に提出。将軍家斉の上覧を受ける。以後幕吏に登用
2~3年	1805~06	60~61歳	第5次測量(畿内・中国)
5~6年	1808~09	63~64歳	第6次測量(四国)
6~8年	1809~11	64~66歳	第7次測量(九州1次)
8~11年	1811~14	66~69歳	第8次測量(九州2次)
11年	1814	69歳	自宅を八丁堀亀島町へ移す
12~13年	1815~16	70~71歳	第9次測量(伊豆七島、忠敬は不参加)
13年	1816	71歳	第10次測量(江戸府内)
文政元年	1818	73歳	死去
4年	1821		大日本沿海輿地図(大図214枚・中図8枚、小図3枚)及び大日本沿海実測録(14枚)が完成

香取市 小野川周辺の 見どころ



⑤ 佐原公園 (諏訪公園)

市街地や利根川が一望できる同公園内は、市民の憩いの広場として親しまれています。公園には展望台や児童遊園などがあるほか、1919(大正8)年に建てられた伊能忠敬銅像もあります。桜の名所。JR佐原駅から徒歩5分。お問合せは②に同じ。



① 伊能忠敬記念館

名主としての前半生と、晩年になってから計10回全国へ測量に出かけた忠敬の人生や、重要文化財指定の測量器具などが展示されています。JR佐原駅から徒歩10分。同記念館(☎0478-54-1118)。<http://www.city.katori.lg.jp/museum/>



⑥ 香取神宮

下総国一の宮で、伊勢、鹿島とならぶ屈指の名社。檜皮葺の屋根に黒塗りの社は重量感に満ちています。国指定の海獣葡萄鏡や県指定文化財、徳川光圀お手植えの梅などがあります。JR佐原駅から車で10分。お問合せは同宮(☎0478-57-3211)。



② 樋橋 (じゃあじゃあ橋)

伊能忠敬旧宅前の小野川に架かる木橋。小野川の東岸から対岸の水田に水を送るために作られた大樋で、元のは江戸時代前期に建造。JR佐原駅から徒歩10分。忠敬記念館前。お問合せは香取市商工観光課(☎0478-50-1212)。



⑦ 千葉県立中央博物館大利根分館

利根川の自然と歴史を紹介する博物館。淡水魚の泳ぐ水槽や、利根川水運の主役だった高瀬船の模型、低地の稲作用具、県指定文化財の漁具や中世の板碑などを展示しています。10～3月の見学は事前に予約が必要です。(☎0478-56-0101)。



③ 歴史的町並み (重要伝統的建造物群保存地区)

江戸時代に舟運で栄えた名残りの商家や忠敬旧宅(国指定史跡)のほか、県指定文化財8件(13棟)なども小野川沿いと香取神宮へ通じる街道沿いに並びます。福新呉服店は「佐原町ぐるみ博物館」の1号館です。お問合せは②に同じ。



⑧ 水郷佐原水生植物園

観藤会(4月下旬～5月上旬)、あやめ祭り(5月下旬～6月下旬)、はす祭り(7月上旬～8月上旬)のほか、音楽鑑賞会などイベント多彩。女船頭さんの操るサッパ舟(植物園～加藤洲十二橋間)は往復約50分。お問合せは植物園(☎0478-56-0411)。



④ 水郷佐原山車会館

佐原の二大祭りである八坂神社夏祭りと諏訪神社秋祭りの山車(国指定重要文化財)の中から2台ずつ交替で展示されています。3面パノラマ画面のビデオシアターがあり、館内はいつも祭りの気分。JR佐原駅から15分。お問合せは②に同じ。

香取市佐原地区は、古くから利根川水運による物資輸送の拠点で、商業地として発展する一方、下総台地を生かした桑や養蚕業で大いに栄えました。「江戸まさり」といわれるほど、佐原は江戸の文化を巧みに取り入れ、独自の文化に昇華して来しました。その面影を残す町並みが小野川沿いや香取街道に残っています。平成8年12月に関東で初めて国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、商家の多くは今

も営業を続けています。小江戸の粋がはじける「佐原の大祭」夏祭り(と秋祭(国指定重要無形民俗文化財))は、関東三大山車祭りの一つとして約300年の伝統を持っています。八坂神社祇園祭の夏祭りは7月初旬の3日間、小野川をはさんで東側一帯(本宿地区)を10台の山車が曳き回されます。諏訪神社秋祭は10月9日(金)～11日(日)の3日間、小野川の西側一帯(新宿地区)を14台の山車が曳き回されます。

